広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第37号　2009．3〉

「織りと衣が語る日本とカンボジアの女性たちのライフ・ストーリー」をテーマとした高等学校家庭科の授業構築

柴　静子　日浦美智代　高橋美与子　一ノ瀬孝恵
佐藤　敦子　菅村　亨　高田　宏

はじめに

高等学校普通教科「家庭」においては，家族・家庭生活の意義，家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させることが目標の一つとされ，それを達成するための内容が設定されている。だが，生徒の興味や学習意欲は低く，学習効果が上がっていないのが実情である。従ってこの目標を達成するための新たな授業の開発が急務となっている。

「家庭総合」（４単位）について言えば，「生活の科学と文化」が内容とされ，例えば衣の領域においては，衣生活文化に関心をもたせ，それを伝承し創造しようとする意欲をもたせることが示されている。一方，２単位の「家庭基礎」においては，この内容は設定されていない。日本の伝統的衣装である「きもの」が，行事以外では着られなくなり，洋服が衣生活の中心を占めている今日，きものの果たしてきた役割と価値を再認識し，未来に引き継ぐことは若い世代の課題であり，したがって「家庭基礎」においても適切な内容を開発し，学習させる必要がある。

さらには，かつての日本がそうであったように，糸を紡ぎ，布を織り，家族の衣類を作り，また布を売って金銭を得ることは，織物の盛んな途上国，特に絹絣の名産地であるカンボジアにおいては女性の重要な仕事である。内戦で消滅しかけた絹絣の復興に努めている日本人，森本喜久男氏の活動と，そこで彼とともに働いているカンボジア女性のライフ・ストーリーを取りあげて国際理解教育を行なうことも視野に入れたい。

以上のような考えから，これらの課題をリンクさせた高等学校家庭科授業を構想して，その効果を確かめることが本研究の目的である。具体的には，日本人の衣生活の変遷を糸，布，きものなどの具体物を通して知らせる。次に，きものと深く関わってきた日本女性のライフ・ストーリーを教師側で作成する。その際に，カンボジアで絹絣を復興させようとしている森本氏の活動と，氏に協力して，織りの技術の復興を担っている現地女性のライフ・ストーリーを入れ込むように構成する。完成した日本とカンボジアの女性のストーリーを生徒の班数で区切り，班毎に担当のパートを決め，社会的背景やきものに関する用語などを調べさせる。日本とカンボジアの女性のライフ・ストーリーに加えて，生徒が調べた関連事項を記入させ，さらには彼女らの人生とかかわりの深い布（日本の絹・麻・木綿，カンボジアの絹）を貼らせた広用紙を作成させる。各班の代表者に，広用紙に記された内容について発表させる。

本年度は，このような一連の授業を計画・実践して，学習効果を測定し，モデル化することを意図して，広島大学附属高等学校２年生１クラス及び同附属福山高等学校２年生２クラスを対象として研究を進めた。本稿では，附属高等学校での取り組みについて，できるだけデータを挙げて紹介し，考察を加えることによって，この新しい教育内容・方法の効果と限界を明らかにしたい。なお，附属福山高等学校の実践も高橋美与子教諭の指導でほぼ同じパターンで研究が遂行されたが，この経過と成果については別の機会に報告することにしたい。

１．附属高等学校での実践の概要

（１）実験授業の実践経過

平成20年10月24日から11月18日まで，附属高等学校で断続的に実施した実験的授業は，日浦美智代教諭が担当し，Ⅱ年２組の39名（男子20名，女子19名の生徒

Shizuko Shiba, Michiyo Hiura, Miyoko Takahashi, Takae Ichinose, Atsuko Sato, Toru Sugamura, Hiroshi Takata, Home Economics Teaching in Secondary Schools Based on Life Stories of Japanese and Cambodian Women through Their Clothes

を対象としたものであった。

一連の授業の第１ステップでは，10月24日（金）の第６時限の一部（14：20 ～ 15：10のうちの30分程度）を使って，①授業の柱となる松田節子のライフ・ストーリー[1]を紹介した後，それを読ませ，次いで，②クラス（39人）を８グループ編成した。その後，③節子の生活してきた時代背景を調べるために，グループごとに担当する年代を決定し，課外学習として調べ活動を行うように指示をした。

第２ステップは，10月31日（金）の６～７時限（14：20 ～ 16：10）で，①布クイズに20分，および②事前アンケートに30分を使用した。次いで，③課外学習において個人が調べてきた時代背景や関連用語についてグループ内で発表させ，節子のライフ・ストーリーに組み込む事項（時代背景）を選定させた。その後，④節子の思い出の着物のはぎれを模造紙に貼らせ，布についての解説を加筆させた。この日の授業だけでは作業が完成しなかったため，11月11日（火）の６時限の授業を使って，時代背景が記載され，思い出の布が貼られた節子のライフ・ストーリー模造紙を完成させた。

第３ステップは，20年度の研究大会の１日目である11月14日（金）の２時限に実施した授業であり，完成した模造紙をもとに，班毎にライフ・ストーリーを発表させた。その後，近年，和服が着られなくなった理由や衣料品の廃棄の問題など，現代の衣生活の課題を考えさせた。最後に，生活文化は主体的につくりだすものであることを認識させた。

第４ステップは，11月18日（火）の５時限に行った，この度の実験授業の事後評価である。布クイズに20分，およびアンケートに30分を使用した。

表１は，一連の授業をビデオ録画し，文字おこしをすることによって，実践経過をまとめたものである。

（２）松田節子とチャン・ソットのライフ・ストーリー

授業の柱となった松田節子のライフ・ストーリーは，この度の授業実践のために思い出深い家族の着物のはぎれを提供してくれた実在の女性（九州在住・61歳）の半生から作成したものである。また，カンボジア女性であるチャンのストーリーも，水野が行った実在の人物からの聞き取り調査の結果をもとに作成したものである[1]。

例として，松田節子のライフ・ストーリーの最初の部分を紹介すると次の通りである。

「1947（昭和22）年４月29日，私，松田節子は福岡県久留米市に生まれました。私の誕生日，４月29日は，昭和天皇の誕生日と同じでした。当時，天皇誕生日の祝日は天長節と呼ばれており，天長節の「節」に恵まれた子なので節子と命名されました。

私が生れた時，父は32歳，母は29歳でした。私は長女で，５歳と３歳の兄がいました。私が３歳の時に，妹が生れました。

私の生まれ故郷である福岡県久留米市は，久留米絣がとても有名です。久留米絣は，織る前に柄を染め分ける織絣に分類されます。綿織物で，藍染が主体です。伊予絣，備後絣とともに日本三大絣の一つとされています。

久留米絣は，江戸時代の後期に，井上伝という当時12歳の少女が創始したといわれています。久留米藩が産業として奨励し，一時は年間200 ～ 300万反を生産しましたが，戦後は洋装化により絣の需要が激減し，現在は少量の生産にとどまっています。

１枚目と３枚目の布は，木綿の久留米絣で，母のもんぺに使っていました。２枚目も木綿も久留米絣です。木綿の藍染めで，仕立物の残りです。」

また，カンボジア女性チャン・ソットの人生は，次のように松田節子のストーリーの中に登場するように構成した。

「1998（平成10）年，私（節子）は，近所のデパートで『アジア物産展』という催しがあるという話を聞き，見に行きました。そこで出合った女性が，チャン・ソットさんでした。チャン・ソットさんはカンボジアでクメール織物の高い技術を持ち，織物の復興のために活動している女性です。

クメール織物は，木の枝や皮，葉，木の実の皮，昆虫の巣などを染料に用いているため，日本にはない鮮やかな色が特徴です。私は，日本の織物とはまた違った素晴らしさを持つカンボジアの織物に魅了されてしまいました。

この布は，その物産展で販売されていたクメール織物です。１枚目は小花柄の織物で，プロフーやタマリンドの樹皮を染料に使っています。２枚目は，パイナップル模様の織物で，ラックやプロフーの樹皮を染料にしています。

チャン・ソットさんは幼い頃から，学校も行かず，生計の手助けをするために織物を続けました。1975年のポル・ポト政権により，カンボジアの文化や伝統が奪われてしまいますが，政権崩壊後，クメール織物を未来へ伝えていくために，織物の復興の活動に携わりました。自然の材料を使い，時間をかけて一つずつ織り上げていく，それは，現在の日本の大量生産・消費の世界とは大きくかけ離れていました。使い捨て主義の現在とは違い，一生かけてモノを大切に使い，地域や人とのつながりを大切にしている彼女は，私に，お金には換えられない価値と豊

かさを教えてくれました。私が幼かった頃，以前の日本は，本当の意味で豊かさにあふれていたのかもしれません。

１枚目の布は，菱形の模様で，ラックやプロフーの樹皮を染料としています。２枚目の布は，少しかわった菱形の模様で，これもラックやプロフーの樹皮を染料としています。」

かつてアンコール王朝が栄え，東アジア世界の文化的中心地であったのがカンボジアである。カンボジアの森には，蚕の餌になる木々が育ち，野生の蚕も沢山いた。その蚕から作られた細くしなやかな生糸を，草木，昆虫などの自然染料をもちいて先染をし，日本と

表１　附属高校での授業実践経過

（１）10月31日　14：20 ～ 16：10

学習内容	生徒の学習	指導上の留意点	分
・本時の説明	・本時の目的と流れを把握する。 （１）ライフストーリーから分かることを読み取る。 （２）社会背景やどんな衣服をきてきたかを把握する。		2
・布クイズ	・布クイズの回答をする。 ・繊維の種類を判別する。 ・繊維に触れ，親しみを持つ。	・授業前に解答用紙を配布しておく。 ・机間指導 ・早く終わらせるように促す。	14
・布クイズの答え合わせ	・布クイズの答え合わせをする。 ・布に触りながら答え合わせをする。 ・男女の制服の素材の違いを学ぶ。 ・各繊維の特徴を学ぶ。 Ex：レーヨン…服の裏地 絹…光沢 綿…綾織，平織 ポリエステル…素材の開発	・解答用紙を回収する。 ・生徒に答えを聞く。自信のあるものから答えさせる。） ・黒板に答えを書く。 ・黒板に制服の素材の繊維の割合を書く。	10
・アンケート	・アンケートを行う。 ・布クイズの布を触りながらイメージを答える。	・アンケートを配る。 ・アンケートの説明をする。 ・机間指導 ・授業者の祖母の着物の話をする。 ・アンケートの補足説明	24
・休憩	・アンケートが終わった生徒から休憩する。		10
・ライフストーリー作成の準備	・ライフストーリー作成の説明を聞く。	・ライフストーリー作成の説明をする。 ・模造紙を黒板に貼り，作り方の例を示す。	6
・ライフストーリー作成	・ライフストーリーを作成する。 ・調べてきたことの中から何を書くか相談する。 ・布を貼る係と時代背景を調べる係に役割分担する。	・模造紙，ペン，テープを事前に準備しておく。 ・机間指導（班に応じて指導する。） ・分かりにくい言葉，作り方の補足説明をする。	43
・次時の予告			1

（2）11月11日　13：20 ～ 14：10

学習内容	生徒の学習	指導上の留意点	分
・本時の説明	・本時の目的と流れを把握する。 （1）ライフストーリー作成の作業	・黒板に本時の予定を書いておく。	1
・綿花を見る	・綿花, 原毛, ポリエステルの綿を見る。	・綿花，原毛，ポリエステルの綿を準備しておく。 ・綿花を黒板に貼る。	1
・ライフストーリー作成	・ライフストーリーを作成する。 ・布を貼る係と時代背景を調べる係に役割分担して作業をする。	・模造紙，ペン，テープを事前に準備しておく。 ・机間指導（班に応じて指導する。） ・分かりにくい言葉，作り方の補足説明をする。	36
・発表の練習	・発表の仕方の説明を聞く。 ・ライフストーリーの発表をする。 ※1～3班までしかできなかった。	・席に着くように促す。 ・模造紙を黒板に貼る。	10
・次時の予告			2

（3）11月14日（研究大会）　10：35 ～ 11：25

学習内容	生徒の学習	指導上の留意点	分
・前時までの説明 ・本時，発表の説明	・ライフストーリーから学んだことを振り返る。 ・本時の流れと発表の仕方を把握する。	・スライド，模造紙，プリントの準備を事前にしておく。	2
・ライフストーリーの発表	・ライフストーリーの発表を行う。 松田節子さんのストーリーと布の説明をする。その当時の時代背景や語彙の説明を加える。 1班　もんぺ 2班　高度経済成長 3班　ミシン，ジーンズの由来 有名なスポーツ選手 4班　大阪万博 高度経済成長の終焉 5班　大島紬，先染 6班　カンボジアのクメール織物 7班　古布，浴衣，藍染 8班　大量生産，大量消費の現状	・スライドの調整 ・模造紙を黒板に貼る。 ・発表の司会をする。 ・補足説明をする。 ・発表の評価をする。	23
・衣服革命の理由を知る。	・近年，和服が着られなくなった理由を考える。 ・服装の歴史(昭和初期～現在)を知る。 ・衣服革命が起こった理由を考える。	・プリントを配る。 ・ 映像「サザエさん」の一部 (2008年11月9日, フジテレビ放映番組)	24
・現代の衣生活の課題を考える。	・廃棄される衣服とその再利用について理解する。		

・大島紬を知る。	・VTR視聴 ・伝統織物である大島紬の生産工程を知る。 ・自然と共存していることを学ぶ。	・VTR「田舎に泊まろう」の一部（2007年10月21日，テレビ東京放映番組）	
・科学技術の進歩を知る。	・VTR視聴 ・生地デザイナーの映像から，化学技術の進歩が生活文化をどのように変えたかを理解する。 ・自然や伝統と新しいものを融合させた，新しい生活文化のあり方を考える。	・VTR「あしたをつかめ：テキスタイルデザイナー」の一部（2008年10月11日，NHK教育放映番組）	
・自然と融合した現代の衣装を知る。	・VTR視聴 ・自然と融合し無駄の無い衣装の誕生を知る。	・VTR「無駄のない衣裳：NHK海外ネットワーク」（2008年10月12日，NHK総合放映番組）	
・まとめ	・生活文化は主体的につくりだすものであることを認識する。		1
○展示物：絣の着物・子どもの着物・伝統的織物を利用した手芸品・手織りの機械・布クイズの布・綿花・大島紬（村山，泥藍，龍郷）・近江上布・備後絣・蚊絣・久留米絣・弓浜絣			

（4）11月18日　13：20～14：10

学習内容	生徒の学習	指導上の留意点	分
・前時の復習，評価	・ライフストーリーの全体を見る。	・各班のライフストーリー（教室に展示）を見るように促す。	5
・布クイズ	・布クイズの回答をする。 ・繊維の種類が判別できるようになったか，確かめる。	・解答用紙を配布する。 ・机間指導	15
・布クイズの答え合わせ	・布クイズの答え合わせをする。 ・布に触りながら答え合わせをする。 ・各自で採点する。	・生徒に答えを聞く。自信のあるものから答えさせる。） ・黒板に答えを書く。 ・各布の説明と，その布の年代を言う。	10
・木綿の重要性を知る。	・世界の繊維生産量のうち，木綿とポリエステルが大半を占めていることを知る。 ・木綿の歴史を知ることで，古くから木綿が大切に扱われてきたことを知る。	・板書 世界の繊維生産量 綿産業の歴史	7
・クメール織物を知る。	・クメール織物の歴史を知る。 ・クメール織物に携わる女性の生活を知る。 ・伝統文化復興に日本人が携わっていることを知る。	・クメール織物を見せる。	8
・まとめ	・アンケートの説明を聞く。（次時までの課題）	・アンケートを配る。 ・アンケートの説明をする。	5

同じように母から娘へ，手から手へと伝えられてきた極意の技法で，絹は手織りにされてきた。カンボジアの絹絣は，独特の光沢，手触りをもつ，森と先人の知恵が結晶した世界最高の布である。しかし，そのカンボジアで内戦が起こり，豊かな森は荒らされ，絹の絣織りの技術も受け継がれなくなった。

内戦がやっと終わり，今カンボジアの人たちは，国の復興のために自分たちができることを子どももおとなも一人ひとり少しずつ試みている。その一つに絹絣の復興がある。絹絣という，内戦で消滅しようとしている伝統文化を復活させることがまず大切である。そしてその精緻で美しい布を販売することは，女性の数少ない収入源にもなる。

カンボジアの絹絣の復興事業に貢献している日本人がいる。森本喜久男氏がその人である。彼は京都の手描き友禅の職人であった。31歳のときに，カンボジアの絹絣，クメール織りに出会い，その美しさに魅了された。現在はカンボジアに暮らしながら，工房を開き，クメール織物を作りながら，チャン・ソットたちカンボジアの人々とともに伝統の絹絣を復興させようと働いている[3)]。

チャン・ソットは内戦前から絹織物の熟達した織り手であったが，戦乱の中で家族も財産の失い，生きる気力をなくしていたが，森本氏と出会ったことによって，絹絣の復興に力をかすことになった実在の人物である。松田節子は，ある日偶然目にしたクメール織りに関心を持ち，そのすばらしさを広める活動をしているチャン・ソットの人生にも歩み寄ることになる。

以上の日本とカンボジアの女性のライフ・ストーリーを軸として，人の半生，きものや布との関係，布の種類や性質等を複合した，人生と被服の学習を展開した。

２．実験授業の効果と課題

（１）布クイズの正答率に見る授業の効果と課題

一連の授業の第２ステップで，次のような布に関する知識を問うクイズ形式の調査を行った。布クイズの正答率は表２に示したとおりである。

調査の方法は，先ず，古布を中心とした彩りのよい布のサンプルを18枚準備し，手触り，光沢など，見たり触らせるなどして，布を識別する調査を行った。調査に用いた布の材質は，絹，木綿，麻，羊毛，ポリエステル，レーヨンであった。

表２が示すように，授業前の調査で正答率が最も低かったのは絹で22.2％，最も高かったのはポリエステルで66.7％であった。授業後の調査では，事前調査とは異なった18枚の布を準備し，同じように識別をさせた。その結果，絹，木綿については正答率がわずかにあがったものの，麻，羊毛，ポリエステル，レーヨンの正答率は逆に低下した。

この原因として，一つに，事後のクイズで使用した各種の布は，事前のものより判別がしにくい布を選んだことがあげられる。第二としては，生徒の生活を見ると，何を材料として作られているのかということや，吸湿性，保温性，光沢など，繊維の特徴を意識した衣生活をしていないことがあげられる。さらに第三として，授業時間に制限があり，一連の授業の中で繊維の特質を十分に理解させる展開ができなかったことがあげられる。このことから，繊維の特徴を十分に理解させる工夫をしながら，布を見る，触るなど，布と視覚的，触覚的に繋がる体験を生徒にもたせ，それを日常の経験と結びつけ，さらには衣生活改善への意欲をもたせる授業を構成することが課題だと思われる。

表２　布クイズの正答率

	事前	事後
絹	22.2%	26.2%
木綿	27.9%	48.4%
麻	56.1%	51.8%
羊毛	33.3%	5.4%
ポリエステル	66.7%	32.2%
レーヨン	24.3%	23.2%

（２）布に対するイメージの変化

図１は，絹・木綿・麻・羊毛・ポリエステル・レーヨンについて，授業前と授業後に生徒のイメージがどのように変化するのかをアンケートで調べたものである。６種類の布に対して，「①身近だ」，「②好きだ」，「③大切だ」，「④着易い」，「⑤美しい（新しい）」，「⑥高価だ」，「⑦実用的」，「⑧歴史がある」，「⑨再利用できる」というイメージを提示して，「とてもそう思う」「ややそう思う」，「どちらとも言えない」，あまりそう思わない」，「まったくそう思わない」までの５件法で聞き，それぞれに５，４，３，２，１点を与えた。図１の縦軸は，回答者の得点の総合計を出して，平均点を算出したものである。

６種類の繊維に対する①から⑨までのイメージは，事後において殆ど全てといえるほど肯定的なものになっていた。これは，実際に古布を交えた美しい布に触れさせることによって生じた傾向と思われる。

生徒は，天然繊維である絹，木綿，麻，羊毛は，歴

史があると感じている一方，ポリエステルやレーヨンは新しい素材であると思っている。個別に見れば，絹は，歴史があり，美しく高価であって身近ではないが，好きだし，大切にしたいと思っている。木綿は，古くからあるもので，実用的で着やすく，好きな繊維であることが示されている。一方，化学繊維であるポリエステルは新しい繊維で着やすく，身近だと思っている。

日本の代表的な繊維について，生徒のイメージを知り，それをうまく取り入れながら，日本人は何を着てきたか，また，私たちは何を着るべきかについて，文化的かつ科学的側面から説明を加えることで学習の範囲はより拡がるであろう。

（3）着物に対するイメージの変化

図２は，「きもの」に対するイメージの変化を示したものである。松田節子のライフ・ストーリーの大部分は，家族や本人が着用していた「きもの」について語られたものである。授業前と後では全体的に「きもの」に対して肯定的な感情が強くなったことが示されている。とりわけ授業後には，「きもの」を身近に感じて大切にしようという気持が強まったこと，並びに美しい価値ある布でつくられた「きもの」を再利用しようという考えが顕著になってきたことが窺われる。

（4）着用しなくなった衣類の処分について

図３は，着用しなくなった衣類の処分について，授業前と後に意識を尋ねたものである。松田節子のライフ・ストーリーでは，「きもの」が家族を繋ぐ重要な役割を果たしている。「きもの」を通して，子供の頃の祖父母，父母，兄弟姉妹の姿が生き生きと思い出されるのである。しかし，衣類には使用限度がある。それでは着用できなくなった衣類はどのように処せばよいのだろうか。

ライフ・ストーリーの中では，松田節子はたくさんの思い出の着物地をインターネットを通じて，古布を入手したい人々に提供し，そのことがさらに人の輪をつくる，ということになっている。図３のように，生徒は，今回の授業を通して，人と衣類の関係性に気づき，愛着のある衣類の終末がきたときの処し方を考えたことが窺われる。即ち，衣類を気楽にゴミ箱に捨てるのではなく，どこかで生かせる道を見つけることを考え始めたようである。これも，この度の取り組みの成果であると思われる。

（5）学習意欲と興味，班での協力及び人生への理解

図４は，一連の学習に対して，（①）生徒が意欲的に取り組んだか，（②）興味を持ったか，（③）グループで協力できたか，（④）ライフ・ステージの特徴と課題が理解できたか，という４つの観点からの調査結果である。

（①）については，「学習にとても意欲的に取り組んだ」と「やや意欲的に取り組んだ」をあわせると，女子は全員が，また男子では82.4％がそのようにした，と答えた。

（②）については，「この学習にとても興味が持てた」と「やや興味が持てた」と答えたのは，女子で94.2％，男子で64.7％となり，男女差が見られたが，概ね良好な結果が得られた。

（③）の「グループで協力できたか」については，「とても理解できた」と「やや理解できた」と答えた生徒は，女子で82.3％，男子は88.2％となり，いずれも高い数値を示した。

（④）の「ライフ・ステージの特徴・課題を理解できたか」については，「とても理解できた」と「やや理解できた」と答えた生徒は，女子で82.3％，男子は88.2％となり，いずれも高い数値を示した。

以上の結果から，一連の授業は，男子生徒よりも女子生徒にとって興味深く意義あるものであったことを知ることができる。おそらく男子にとっては，この度のような女性中心のライフ・ストーリーは自分の人生とさほど関連がないと感じられ，そのために興味や学習意欲が女子ほどは高まらなかったのであろう。今後の課題として，主人公の人生を縦糸に，そして父親や夫など男性との関わりを横糸にして，男女で営む人生のストーリーを豊かに織り上げることの必要性が示唆された。

（6）ライフ・ストーリーに関する興味

図５は，松田節子とチャン・ソットのライフ・ストーリーに興味を持ったかどうかを尋ねた結果である。節子のストーリーについて，女子の94.2％は「とても興味が持てた」もしくは「やや興味が持てた」と答えている。一方男子でそのように答えたのは35.3％と低率であった。また，チャン・ソットのストーリーについては，女子の58.9％は「とても興味が持てた」もしくは「やや興味が持てた」と答えているが，男子でそのように答えたのは29.4％と極めて低率であった。

節子のストーリーには，平凡だが温かい人々に囲まれて，正直に，ひたむきに人生を歩んでいる姿が描かれている。また，チャン・ソットのストーリーには，カンボジアの内戦によって家族を殺され，家と土地をなくして，絶望の人生を送っていた絹織りの名手が，日本人の森本喜久男に出会ったことで，再び絹絣を織る気力を湧かせ，自分の技を若い女性たちに伝えてい

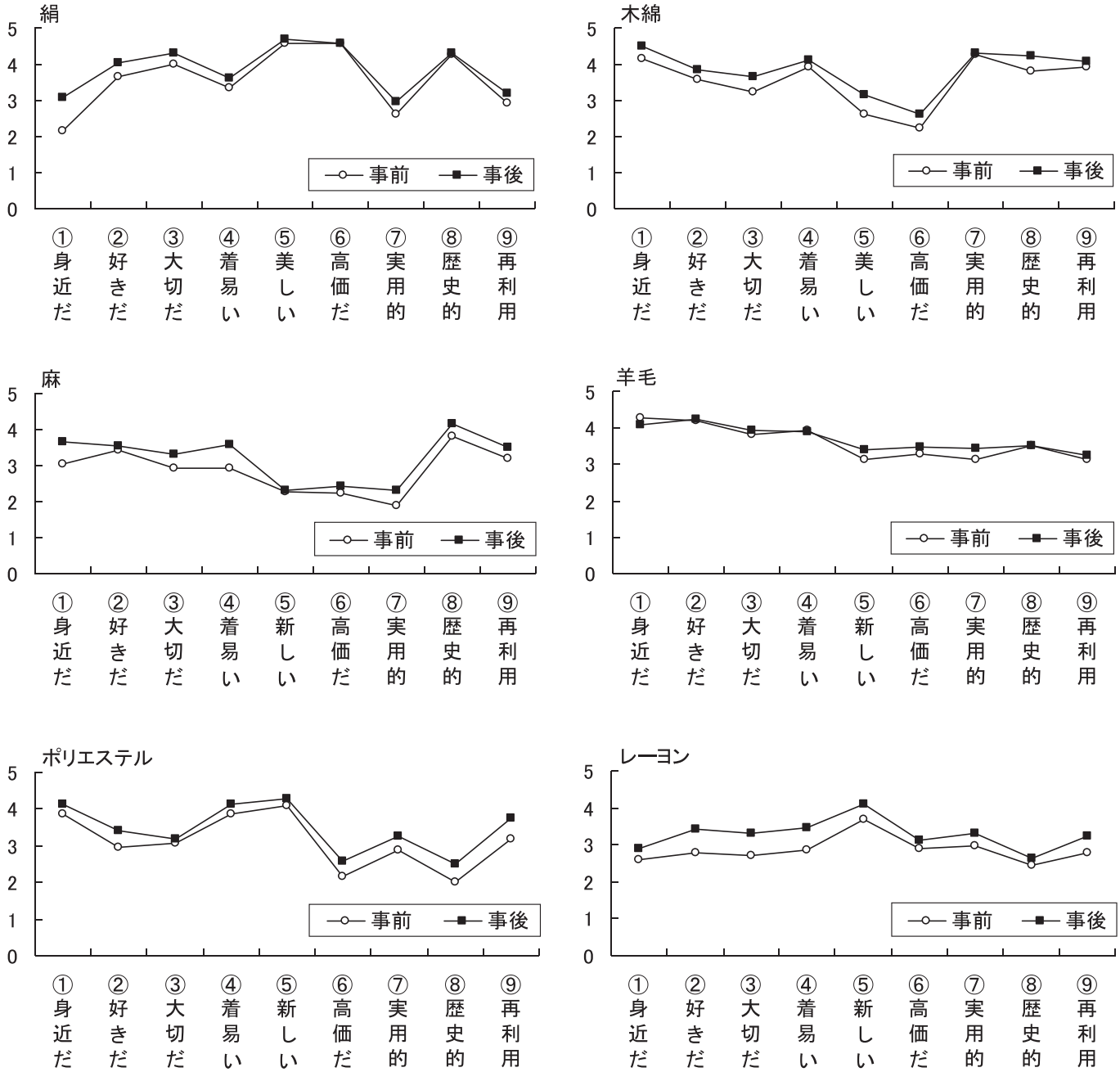

図１　木綿・絹・麻・羊毛・ポリエステル・レーヨンに対するイメージ

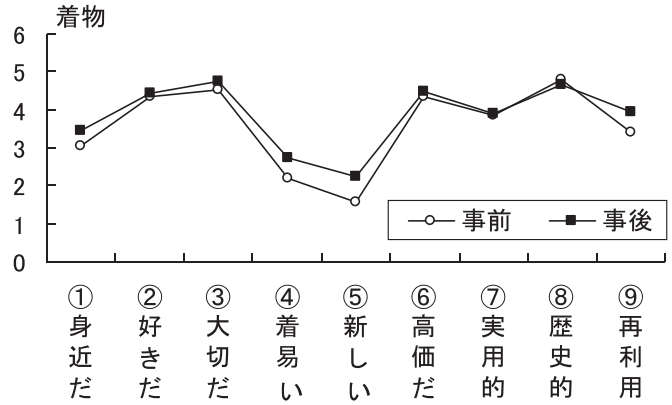

図２　きもののイメージ

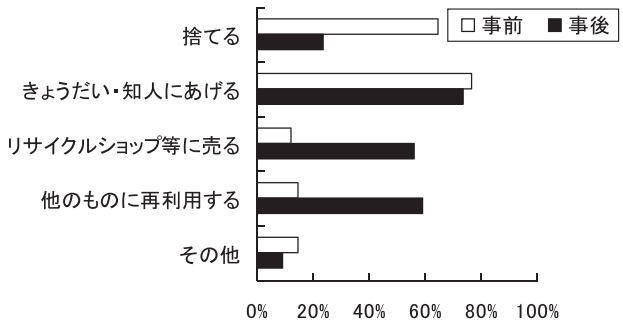

図３　着用しなくなった衣類の処分方法

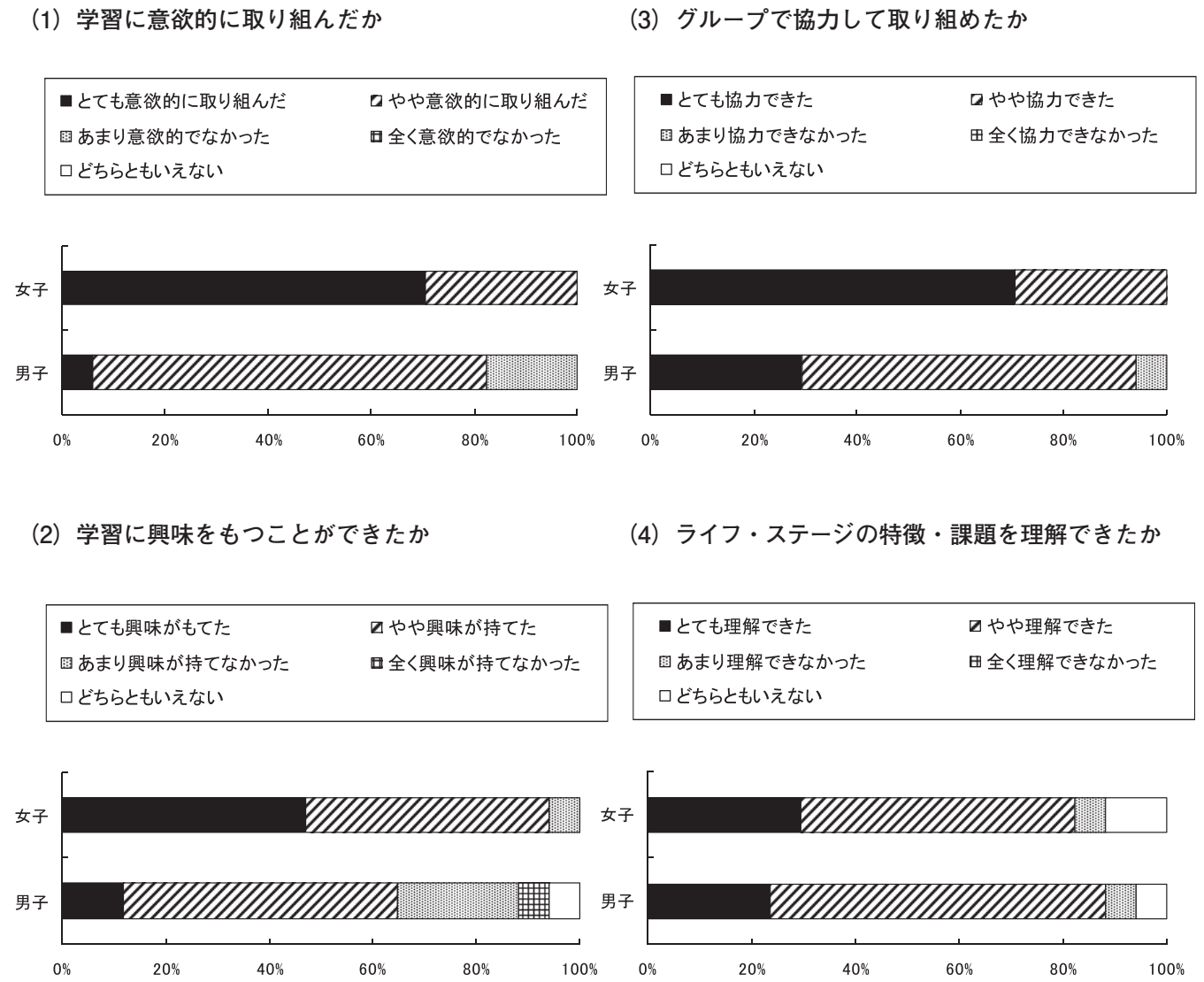

図４　学習への意欲・興味・協力および内容の理解

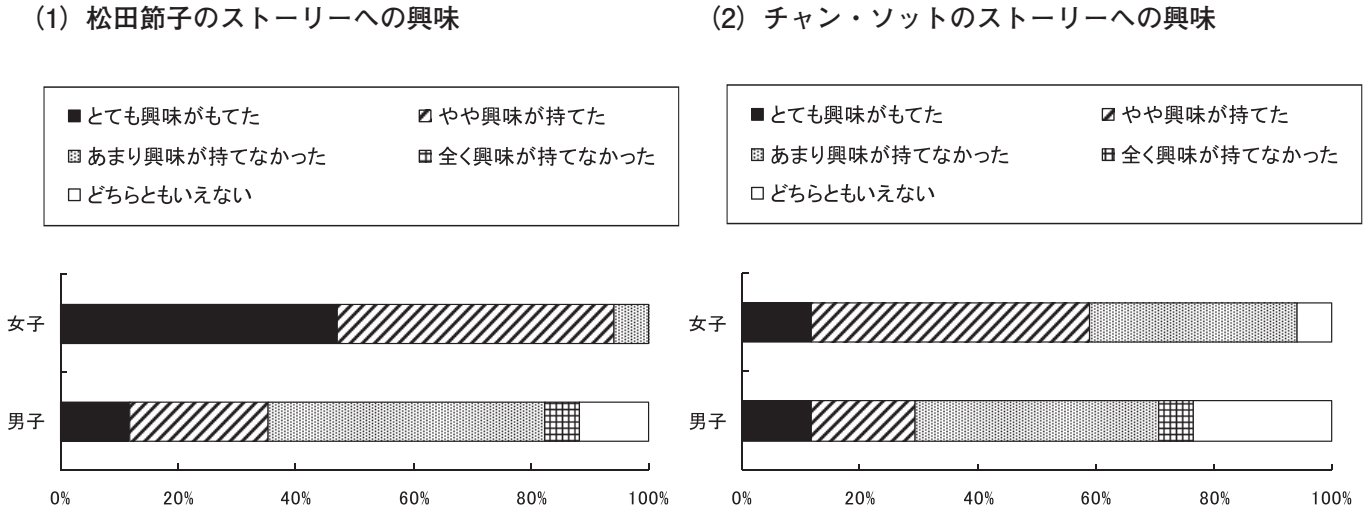

図５　松田節子のストーリー（左）とチャン・ソットのストーリー（右）への興味

る感動的な姿が描かれている。

まだ，人生の入り口に立っているに過ぎない高校生に対して，このようなストーリーに興味をもたせるには，付加的な指導が必要なのかも知れない。例えば，高齢者にインタビューをさせることによって，節子の人生の物語をより身近な，具体的なものに改変させることである。またチャン・ソットの人生を視覚的に理解させるために，まずは森本を取材したビデオ「遠くにありてにっぽん人：甦る黄金の絣－カンボジア・森本喜久男」(2004年10月17日，NHK BS Hiで放映）を視聴させることである。これから発展して，同氏の著作「カンボジアの絹絣の世界（NHK ブックス，2008年発行)」等の関連図書を読ませることが考えられる。森本の絹絣の復興にかける情熱と誠意に溢れた姿を知ることにより，これまで想像もしなかった途上国の織物・織手と日本人の援助の世界が開かれ，とりわけ男子生徒に強い影響を与える可能性がある。

おわりに―「織りと衣が語るライフ・ストーリー」の授業モデルの構築に向けて

附属高等学校で実施された，この度の「織りと衣が語るライフ・ストーリー」の授業は，次のような準備段階と流れをもつものであった。

(準備段階)

①教師側で学習させたい女性のライフ・ストーリーを作成する。その際に日本の伝統的衣裳である「きもの」に着目し，古布を中心に収集しておく。

②生徒に触れさせ，繊維の種類を考えさせる布クイズ教材を作成しておく。

③教室に絣，大島紬，クメール絣など，内外の様々な布・古布を展示して，学習環境を整えておく。

④カンボジアの絹のいろいろな模様のはぎれを和紙に貼り，縞帳を作っておく。

(授業の流れ)

①ある女性のライフ・ストーリーを読ませ，社会背景や衣裳など，調べる事項を各班で設定させる。

②布クイズを通して，繊維の手触りや材料としての特徴，布の利用法などについて学習させる。

③広用紙に，既存のライフ・ストーリーを記し，調べた事項を加えさせるとともに，主人公の思い出の布を貼らせる。

④班毎に，自分たちが手を加えたライフ・ストーリーを発表させる。(例えば，ある班は，主人公の戦時中の姿を「もんぺ」を通して語る，など。)

⑤近年の衣生活では「きもの」が着られなくなっていることに着目させ，戦後，衣服革命が起こったこと及びその理由を考えさせる。

⑥日本にはまだ伝統的な織物が継承されていることを知らせ，自然と共生した織物が存在する一方で，新素材が登場してきていることを理解させる。このような中で，生活文化は主体的に創り出すことが必要であることに気づかせる。衣料品の再利用についても考えさせる。

⑦世界の繊維の生産量を知らせ，木綿とポリエステルが二大繊維であること，木綿の歴史は古く，大切に扱われてきた繊維であることを理解させる。

⑧カンボジアでは，絹織物の復興が日本人と現地女性たちの手で行われていることを知らせて，絹織物のもつ意味を深く考えさせる。

以上の実験授業は，日本とカンボジアの女性のライフ・ストーリーに織物・布・きものを織込んで，①学習領域の統合し，②生活文化の継承と創造をねらうとともに③途上国援助のあり方を考えさせるという考えで構想された。実施後，生徒へのアンケート調査を通して学習効果を測定した結果，男女の性差が顕著に出る内容であるという特徴を持つこと，そうではあるが，意欲・興味，理解の面で男女とも良好な反応を示したことが明らかになった。

このことを踏まえて，上の①～⑨の授業の流れを精査し，より無理がなく効率のよい数時間の授業を構想することが今後の課題である。その際に，この度は報告ができなかった，附属福山高等学校での高橋美与子教諭の実践が多くの示唆を与えてくれると思われる。

注

1）松田節子のライフ・ストーリーは，実在の人物である松下節恵さんの協力を得て作成した。授業で使用した布（きもののはぎれ）は松下さんが提供してくれたものである。厚く御礼を申し上げます。

2）水野馨生里著「クメール織物の生活史」(未刊行）は，水野氏の慶應大学での卒業論文である。氏のご厚意に感謝します。

3）森本喜久男は1996年１月に「クメール伝統織物研究所」を開設し，カンボジア伝統織物の復興と活性化，伝統的養蚕の振興，綿花と自然染料となる植物の栽培・育成を推し進めている。